

ライフ
ストーリー

武田 丈

アクティビズムのすすめ

僕は2000年4月に関学の教員になって以来、セクシュアリティの多様性の尊重のための教育や実践に少しずつかかわるようになっていきました。2001年度の授業から少しずつセクシュアリティの多様性について語るようになり、2003年度からは総合コース「ヒューマンセクシュアリティ」（現在の人権教育科目「セクシュアリティと人権」）を代表となって立上げ、2013年度からは人権教育研究室が毎年5月に主催する「関学レインボーウィーク」の実行委員会のメンバーとして活動しています。関学の教員となって27年目を迎え、学内でもSOGIEをはじめとするキャンパス内の多様性の尊重、インクルーシブコミュニティ実現の推進に声を上げ続ける存在として認識されるようになってきましたが、大学生までの僕はSOGIEの多様性についての知識が全くなく、LGBTQ+の人たちを「自分とは関係ない別世界の人たち」や「近づきたくない人たち」と思うばかりでなく、LGBTQ+の人たちを揶揄する友人たちに同調さえしていました。もちろん、当時はSOGIEやLGBTQ+といった言葉もなかった時代なのですが、今から思うと本当に申し訳ないという気持ちや罪悪感でいっぱいになってしまいます。そんな人権に関心だった僕が、どうしてアクティビズムに積極的に関わるようになったのかについて、今からお話したいと思いません。

アキさんとの出会い

僕がSOGIEの多様性尊重のための活動にかかわるようになった背景には、後述するようにさまざまな要因があるのですが、もっとも大きな出来事は「アキさんとの出会い」でした。僕が関学の社会学研究科で修士課程（社会福祉学専攻）を修了し、米国の大学院（博士課程）への進学のための渡航準備していた1990年の4月末に、母の知り合いで米国在住の美容師/美容室経営者の日本人のアキさんと米国人のパートナーのゲイのカップルが来日し、数日間日本観光のアテンドをすることになりました。当時の僕はLGBTQ+についてほとんど知識がなく、また偏見をもっていたのですが、母からの依頼であり、また数カ月後に渡米した際にお世話になる可能性があるということもあって仕方なしに引き受けたという感じでした。恐

る恐る観光のお供をしていると二人ともすごく自然体でフレンドリーで、今までゲイの人たちに対してネガティブな感情をもっていた自分が恥ずかしくなったのを今でもしっかりと覚えています。この出会いによって、知識の欠如や無関心、あるいはマスメディアがつくるゲイやトランスジェンダーの人たちのイメージによって植え付けられた僕の中の偏見が崩れていったのです。渡米後にもアキさんに旅行に連れて行ってもらったり、家に泊めてもらったり、相談にのってもらったりした経験に加え、ソーシャルワークの大学院のプログラムの中でカミングアウトしている多くのLGBTQ+の人たちの姿を見たことによって、さらにこれまでの自分の考え方を反省したのです。

帰国後の出会いとアクティビズムの第一歩

自分がいかに SOGIE の多様性について無知で、そのためにこれまで多くのLGBTQ+の人たちを無意識に、あるいは意識的に傷つけてきたことを大いに反省して帰国した僕は、2000年4月に関学の社会学部社会福祉学科で教鞭をとるようになった際に SOGIE の多様性を学生たちに伝える必要性を強く感じていました。なぜなら、自分が教える学生の中には卒業後に児童養護施設等で働く者もあり、もし僕と同じように SOGIE の多様性についての知識がなければ、入所しているLGBTQ+の子どもたちを傷つけてしまう可能性があると思ったからです。しかし、自分の専門は多文化・国際ソーシャルワークで、留学中も SOGIE やLGBTQ+について学んだり、研究したりする機会はありませんでした。どうしたらいいか悩んでいた僕がアクティビズムの活動へと踏み出せたのには、2つの出来事がありました。

1つは2000年7月にカナダのモントリオールで開催された、ソーシャルワークの国際大会への参加です。この大会にはもともと自分の研究発表のために参加予定だったのですが、知り合いの研究者からこの大会で世界各国の「同性愛と社会サービス」について話し合う分科会で日本の状況を話してほしいという依頼を受けたのです。しかし、当時はまだまだ日本のLGBTQ+の人たちの状況や活動についてほとんど知識がなく、自分で

報告できるような状況ではなかったので、関西エリアで活動していた団体（AGP 関西）にコンタクトして僕の代わりに発表してもらったことから当事者団体とつながることができたのです。

もう1つは、この大会参加とほぼ同時期に、在留外国人に対する HIV/AIDS 支援団体（NPO 法人 CHARM）の立ち上げにかかわることになったことです。HIV/AIDS 支援団体ということで、この活動を通して、ゲイ・バイセクシュアル男性に対する支援・啓発活動をしている団体や当事者とのネットワークが広がっていったのです。これらのネットワークでの出会いが後押しとなり、2001年度の自分の授業にゲストスピーカーとして多様なセクシュアリティの話をして頂いたことがきっかけとなり、2003年度の総合コース「ヒューマンセクシュアリティ：性の常識を問い直す」のスタートに結びついていきました。このオムニバス形式の授業の代表を20年以上続ける中で、LGBTQ+の当事者や支援者などの非常勤講師やゲストスピーカーの方たちの話を伺い、ますます日本社会の中でLGBTQ+の人たちが直面する課題、日本社会の無理解・偏見、啓発の必要性を痛感していったのです。

関学レインボーウィークの誕生と学び

「ヒューマンセクシュアリティ」の代表をつとめていたせいも、2005年前後だったと思いますが、学内のLGBTQ+の当事者学生の親睦団体のリーダーから「昼休みに気兼ねなくメンバー同士が集まって昼ご飯を食べるスペースを確保してほしい」という要望があり、それに答えることでこの団体と緩やかなつながりができた事も、この後の僕のアクティビズムの活動に大きな影響があったと思います。「ヒューマンセクシュアリティ」の立上げ以降も、学内ではSOGIE/LGBTQ+をテーマとした人権問題講演会が開催されるなど、当事者の話を聞く機会は増えていきましたし、日本社会においても次第に「LGBT」という言葉が認知されるようになってきました。当事者の方々の話を聞くと、多くの人が心を揺さぶられます。それは「ヒューマンセクシュアリティ」の授業を見てみても一目瞭然です。僕が講義しているときと、LGBTQ+の講師の方が話をされているときで

は、受講生の態度や表情がまったく異なるのです。ただ、講演会や授業を聞いているときには心を揺さぶられても、LGBTQ+の人が直面している課題がキャンパスに存在すること、あるいは自分の発言や態度が無意識にLGBTQ+の人たちを傷つけている可能性があることには、なかなか想いが馳せていないという現実がありました。こうした状況をなんとかしたいという願いから、私も所属する学内の人権教育研究室が2013年5月に開催したのが、パネルディスカッション「関学の中のセクシュアルマイノリティ：すべての人が自分らしく振る舞える学びの共同体を目指して」でした。学内の親睦団体に声をかけて登壇してくれたLGBTQ+の在学生1名とカミングアウトしている卒業生3名が、自分たちがキャンパスでどのような課題に直面したかを赤裸々に語ってくれたこのイベントの反響を非常に大きく、これを契機に毎年5月に1週間の関学レインボーウィークが開催されるようになったのです。

毎年5月に開催される関学レインボーウィークは、前年の10月ぐらいにウィークの主旨に賛同する教職員、LGBTQ+の学生、LGBTQ+以外の学生が参画して実行委員会が組織され、5月までの開催に向けてテーマやさまざまなプログラムが企画・準備されるのですが、ここでの経験も僕の現在のアクティビズムの活動に大きな影響を与えてくれました。もともと学内におけるセクシュアリティの多様性の啓発や尊重を目的に始まったウィークですが、当初は啓発に重きを置くあまり「お祭りの的」になって、「LGBTQ+を搾取している」や「啓発するだけでキャンパスの現状な何も変わらない」といった批判の声が実行委員会の中でもあげられ、実行委員会の雰囲気非常に重くなったことが何度もありました。こうしたLGBTQ+の実行委員の訴えを聞くことは辛いけど、自分の中に刷り込まれた「性別二元論」や「異性愛主義」に基づく考えや発言に繰り返し気付くチャンスでもありました。そこから逃げずに、自分の中の偏見や理解の欠如に向きあってきたからこそ、現在の僕のアクティビズムが成り立っているのだと思います。



アクティビズムを続ける理由

ここまで、僕が SOGIE の多様性尊重のアクティビズムにかかわるようになったことに影響した、人生の中での出会いや出来事についてお話してきました。ただその以前から、僕は移民や難民、開発途上国の貧困者、ストリートチルドレン、戦争被害者についての研究やアクティビズムにかかわってきました。それは、ソーシャルワークやキリスト教が身近だった家庭環境、当事者として障害者の自立運動に取り組んでいた親友の存在、ソーシャルワークを専門領域として研究や実践に携わってきたこと、学内の人権教育研究室にかかわったこと、などの影響が大きかったと思います。また、米国の保守的な南部で長期間、フィリピンやインドでも短期間、マイノリティとして暮らした経験も影響していると思います。

とは言え、日本にいる限り和人の日本国籍保持者であり、シスジェンダー・ヘテロセクシュアル男性で、しかも大学教員である僕が、日々の生活の中でマイノリティだと感じたり、抑圧や差別を経験したりすることはほとんどありません。基本的に日本で教育を受けた多くの人は、僕と同じ

ように「人権、自由、平等、民主主義」といった考えの重要性を学校で教えられ、「差別はよくないこと」という社会規範を刷り込まれているのではないのでしょうか。しかし、「自分は偏見を持たないし、差別もしない」と心で誓っても、私たち「ふつうの日本人」が「ふつうであたりまえ」の生活を維持しようとする、どこかで誰かを抑圧してしまう可能性があります。なぜなら、残念ながらこの社会には構造的差別が存在するからです。たとえば、私たちが100円ショップで安価な商品を購入することは製品工場で働く開発途上国の貧困者に対する経済的搾取を促進することにつながるかもしれませんし、何気ない「彼氏いるの？彼女いるの？」という発言はヘテロセクシュアル以外の人を傷つけていたり、「結婚するかどうかは本人の自由」という発言が結婚したくてもできない同性愛カップルの存在を念頭に入れていない現れだったり。私たちの「あたりまえ」は誰かを犠牲にして成り立っていることについて、あまりにも私たちは無自覚のように思います。

もちろん、「100円ショップを全く利用しない」や「すべての人に配慮して常に発言する」といったことは不可能でしょう。僕もそんなことはできません。ただ、「完璧にできないからやらない」ではなく、できることから少しでもやっていきたいと僕は思っています。心の中で思ったり、誓ったりするだけでは構造的差別がはびこる社会は変わりません。単に「自分は偏見を持たない、差別しない」と誓うだけでは、構造的差別が社会の中で維持されるのに加担してしまうことに結果的になってしまいます。だからこそ、僕は可能なことからアクティビズムを実践しています。皆さんは、どうですか？「アクティビズム」と聞くと、「堅苦しい」や「ハードルが高そう」と思うかもしれませんが、本やWebで正しい知識を身につけることから始めて、ソーシャルメディア上のアクティビズムに関する情報に「いいね！」をしたりシェアしたり、たまにフェアトレードやオーガニックの商品を購入してみたり。そうしたことも難しい人は、まずはアクティビズムを実践している人に対して「意識高い系」と言ったり、「自分とは無関係」と思ったりすることを改めることから始めませんか。「自分一人ではたいしたことはできないけれど、みんなが少しずつでも行動に移すこ

とができれば社会は少しずつよくなっていく」ということを信じて、僕は
アクティビズムを続けています。